

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- 所長に就任して
- 豊田市の貴重な植物
シデコブシ
- 連載 矢作川のいきもの 6
- 今月の一枚
- 研究所の調査風景

2003 April
No.60

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/index.html> e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます



所長に就任して

梅村 稔二

平成14年4月1日施行の派遣法の改訂により、豊田市矢作川研究所の組織替えが一部行われました。組織替えの要点は、研究所が第三セクターから豊田市の直営になったことです。市営になったことで運営に必要な組織の名称、構成員等に若干の変更があり、組織替えにともない新しく研究所長を拝命しました。引き受けた以上は所員とともに市営の研究所にふさわしい努力を重ねたいと考えております。

2003年は国連の「国際淡水の年」宣言もあり、世界の目も河川に集中しております。矢作川でも、この春2回のシンポジウムが開催され、流域の皆さんの関心も高まっています。戦後58年にわたり豊かな生活をめざした結果、経済的には豊かになりましたが、この間に失ったものも多く、その一つが身近な自然や河川の水環境です。矢作川では平成のアユ不漁時代をはじめ河川全体を考えても、時期によって降水量よりも利水量が多くなり水量が不足し、それが、シルトの堆積や藻類等繁茂の起因となることや、ダムから低水温

の水が流れること等さまざまな課題が山積しています。わたしたちがめざした豊かな生活のツケが今になって河川に集まり、水環境は深刻な状況にあります。これらの課題を含め矢作川流域の自然環境の保全や生活の見直しをどのように進めていったらよいのか、豊田市矢作川研究所の役割と責任は重いと言わざるをえません。課題の周辺にはさらに数え切れないほどのさまざまな小課題が山積し、それらには大小の利害関係が存在するだけに解決には時間を要します。しかし、このまま放置しておけば次の代に大きなツケとなつてはね返ってきます。21世紀の環境時代を迎えて豊田市矢作川研究所の使命を重く受け止めるとともに、官民一体となって流域の問題として広範に取り組まなければならないと考えております。所員とともに時間はかかっても少しずつ着実に課題解決に取り組んでいく所存であります。大方の皆様のご支援・ご協力を切望いたします。

(うめむら じゅんじ、豊田市矢作川研究所 所長)

シデコブシ

鈴木勝己

3月末から4月はじめにかけ国道153号線越戸ダム湖の対岸やすぐ上流の鎮平橋の対岸にうすいピンクの花が望まれ、「何という花ですか」とよく聞かれます。これが「海上の森」で問題になったシデコブシです。豊田市にもシデコブシがあるのですかとびっくりされます。

シデコブシはモクレン科で、モクレン、コブシなどの花とよく似ており、咲く時期も同じです。とくにシデコブシとコブシはよく似ていますが、シデコブシの花弁は淡紅色か紅色を帯びた白色で、ガク片が花弁になり12~18枚、ときに20枚もあります。コブシは白色の六枚の花弁があり、県内には自生がなく植栽されています。和名の四手拳は、四手は細長い花弁を玉串やしめ縄に付ける四手(しで)に見立て、拳は実のゴツゴツした様子から付けたものです。



のシデコブシの大小株立ちした群落があります。花はみごとですし、豊玄池を通して見るには静かで絶好な場所です。これらを含め豊田市内には、13町内の山間の丘陵地など約45箇所に650株があることを現在確認しています。

市内や東海三県の自生地は伊勢湾周辺、それも今の伊勢湾でなく地質時代の鮮新世で今から約400万年前にあった東海湖(琵琶湖の7~8倍)の湖岸に当たる場所です。このような場所に生えていた遺存種であり、化石も出ています。当時は矢作川の代わりに木曾川が流れ込み、チャートが風化した硬い礫が湖岸に堆積しました(現在も犬山市などに見られます)。その後、約250万年~5万年前にかけて猿投山や三河高原など花崗岩の山地が隆起し、矢作川などが流れ出すと、風化花崗岩の土砂が流され、東海湖は小さくなりました。堆積した礫層も流され、その流された礫が谷間に新たに堆積しました。このように礫の堆積場所は新旧両方があり、どちらもその礫の下に不透水性の粘土層ができ、湧き水が表面を流れ湧水湿地ができて、東海地区



なぜシデコブシが問題なのでしょう。それは東海三県だけに自生する絶滅が心配されている貴重な植物だからです。国や県ではシデコブシを絶滅危惧種Ⅱ類に指定し保護を呼びかけています。県内では、1970年に国指定天然記念物にされた渥美半島の湿地から岡崎市東部の一部、豊田市、藤岡町、瀬戸市、春日井市、名古屋市、犬山市の各小さな湿地に自生します。岐阜県は東濃地方で大規模な面積で分布し、三重県は四日市などの北部地区です。

豊田市では、越戸ダム湖以外の見所は、野見山への登山路脇の湿地で、直径30cmほどの大木が数本見られます。平成13年度に市指定天然記念物になった琴平町の豊玄池奥の湿地では、約150株(730本)ほど



上高町

独特の植物（東海丘陵要素系植物）の1つシデコブシが生育しているのです。

シデコブシの種は鳥に運ばれ（種ではあまり繁殖できませんが）今ではチャート礫の堆積場所以外でも花崗岩の風化した砂礫や泥の堆積した泥沢湿地にも生育しています。この場所は底には固い花崗岩があるため根が浅く横に張り出した株や曲がった枝が多く見られます。

シデコブシの自生地は、このように何時も水が表面を流れている湧水湿地や泥沢湿地ですから水源である背後地がなくなれば枯れ、また明るい場所を好むので竹や常緑樹が生えれば枯れます。

貴重なシデコブシを含め東海丘陵要素系植物は市内をはじめ東海地方にはもっと多く自生していたはずが、湿地の埋め立てや山地の取り崩しで減少しているのです。人間との共生を考慮し、どうかいつまでも生育するよう見守っていきましょう。

（すずき かつみ、環境カウンセラー、豊田市自然愛護協会 副会長、日本植物分類学会 会員）



勘八峽

連載 矢作川のいきもの 6

カエルの住む水辺

神松幸弘

カエルの仲間が属する両生類(Amphibia)とは、Amphi- (両方)に-bia (bios生きる)という意味からきているそうです。これは両生類の多くが子供時代を水の中で過ごし、変態すると陸上で生活するというユニークな成長をたどることからきています。水一陸両用と言えはなんとも器用に思えますが、実はその反対で移動能力の低い彼等は、水と陸地が接した場所（しかも淡水にかぎる！）にしか住むことが出来ない大変不器用な生き物なのです。これだけでも地球上で住める場所が非常に限られそうなのに、水環境と陸上環境の双方の組み合わせにも条件がきびしく、水環境、陸上環境どちらか一方でも悪くなってしまうと生活できなくなってしまうのです。こんなふうに考えてみると、私たちの普段のカエルとの出会いもなんとなく貴重に思えてきませんか。



アマガエル (お釣土場)

そんなカエル達との出会いを求め、矢作川に散歩に出かけてみました。市街をぬけて古岸水辺公園辺りまで行けば、川岸の森から川の音に負けまいと鳴く



トノサマガエル (矢作川の支流、櫻尾川)

アマガエルの声が聞こえてきます。アマガエルは川岸にできる水たまりで産卵をしているらしく、夏にはたくさんの子ガエルたちが足下で跳ね回っています。それから、突然水たまりに「ドボン！」と飛び込む大きなトノサマガエル。驚かされた経験をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。

ところで、カエルは生態系の中で中間的な消費者に位置しています。虫などを食べる一方、小さい頃にはカマキリやクモなどに、また大きくなってからも鳥やヘビ、ほ乳類等、随分とたくさんの生き物の餌になっています。矢作川は豊田市の市街域周辺を流れる川でもありながら、他地域と比較して多くの鳥類やほ乳類が生息しているそうですが、それにはカエルが大きく貢献していることでしょうか。矢作川はカエルにとっては規模が大きすぎるので本流よりもむしろ、川岸に隣接する水田や水たまりがカエルたちの生活の舞台です。それでもそれらの水辺は矢作川が存在することによってはじめて成り立っており、それに依存して生活しているカエル達もまた矢作川の自然の一部といえます。水と陸とのうまい関係、とりわけ生き物を育む場としての“川”を考える上でカエルもまた重要な生き物ではないのでしょうか。

（こうまつ ゆきひろ、総合地球環境学研究所 助手）

今月 の 一 枚



「準備完了！ 鮎はまだかな？」 by 鮎釣り舟

(平成十五年二月二十八日 古川水辺公園にて)

お知らせ

研究所では、流域の方々から寄せられた写真を重要な歴史資料として位置づけ、保存作業を続けてきました。少しずつですが、その資料が体系をなしてきましたので、ここで皆さんとともにそれらの写真を眺める機会を得たいと考え、記録展を企画しました。お近くにお越しの際にはぜひお立ち寄りください。



川と暮らしの 記録展

開催日：4月22日(火)～5月9日(金)
場 所：市役所南庁舎一階市民ロビー
問い合わせ先：
豊田市矢作川研究所
☎0565-34-6860

研究所の 調査風景

3月6日(木)

古川プロジェクトに調査協力をして頂いてきた愛知工業大学の河川・環境研究室の皆さんに卒業・修士論文報告ゼミを行っていただきました。主に矢作川中流域の河床の経年変動、河床砂礫の粒径、大型糸状藻類、哺乳

類の生態について調査成果を発表され、続いて内田臣一助教授から砂利投入事業に関する提言を受けました。また、名古屋大学農学部の岡田夕季さん

報告の様子



には豊田市における淡水産カメ類についての卒論を発表していただきました。(小川)

3月8日(土)

アユ溜上の有無を確かめに、河口から12km地点の藤井床園工まで行ってきました。春の強風が吹く中、投網と釣りによる採集をおこないましたが、アユは採集されませんでした。河川水温は10度まで上がっていたのでもうすぐアユが現れることでしょう。(山本)

編集後記

今月号に寄せられた文章を読みながら、春の変化は、気を付けないとなくなる可能性が大きいことに気づきました。春に喜びつつ、この楽しみを守っていきたいという思いも強まりました。(小)

ご意見・ご感想をお寄せください

Rioは再生紙(100%)を使用しています